

YNU FDニュースレター

2011年11月 特別号

横浜国立大学 大学教育総合センター FD 推進部

■平成22年度 授業評価アンケート実施状況・分析

FD 推進部会 授業改善ワーキンググループ

本「特別号」では、平成22年度前期および後期に行った「学生による授業評価アンケート」の結果について報告いたします。

FD推進部会が実施母体となり、平成17年度後期より全学部・教養教育科目統一で授業評価アンケートを開始してから5年が経ちました。当初は、『授業改善に向けて』というタイトルの冊子を作成し、そこに授業評価アンケートの実施状況・分析、および回収されたすべての「自己点検票」（平成19年度前期までは「授業改善計画書」）を掲載していましたが、平成20年度よりFDニュースレター「特別号」という形で「授業評価アンケート実施状況・分析」および「自己点検票総括」のみを掲載した冊子を発行することにいたしました。今回の「特別号」では更に内容を簡素化し、「授業評価アンケートの実施状況・分析」のみを掲載しております。

なお、「自己点検票」については、大学教育総合センターホームページ上で「自己点検票集録」という形で公開しております（アクセスの方法については、下記をご参照ください）。

「授業評価アンケート」の主な目的は、個々の教員の授業改善にあります。アンケートの回答を組織的に集計・分析し、その結果を全学の教育改善に活かすこともその目的に含まれています。本誌の報告がマイクロレベルでは個々の教員の授業改善に、そしてミドル・マクロレベルでは各部局および全学の教学改善に少しでもお役に立てれば幸いです。

★自己点検票集録アクセス方法

< <http://www.yec.ynu.ac.jp> > にアクセスし、トップページの「お知らせ」にある「平成22年度自己点検票集録」を選択し、ユーザー名、パスワードをご入力ください。ユーザー名、パスワードは全教員共通です。アンケート対象科目の先生方へは別途文書を送付しておりますが、紛失された方、または文書を手にとっていない方は、教務課大学教育係（045-339-3107、kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp）までご連絡ください。なお、公開範囲は学内関係者に限定しています。

平成 22 年度授業評価アンケート実施状況・分析

平成 22 年度（前期・後期）の実施状況

平成 22 年度の「学生による授業評価アンケート」は、前期が平成 22 年 7 月 7 日～ 28 日に、後期が平成 23 年 1 月 7 日～ 31 日に実施された。

実施対象科目総数は、前期が 1355 科目、後期が 1311 科目であった。実施対象科目のうち、実際にアンケートが実施された科目数および実施率を表 1 に科目区分別に示す。

表 1 科目区分別 アンケート実施状況

科目区分	H22 前期			H22 後期		
	対象科目	実施科目	実施率	対象科目	実施科目	実施率
全科目	1355	1097	81.0%	1311	1018	77.7%
教養教育科目	567	480	84.7%	519	423	81.5%
基礎科目(人文社会系)	25	22	88.0%	22	19	86.4%
基礎科目(自然科学系)	40	36	90.0%	33	27	81.8%
現代科目	27	24	88.9%	23	20	87.0%
総合科目	17	16	94.1%	9	8	88.9%
情報リテラシー科目	22	21	95.5%	20	18	90.0%
基礎演習科目	51	38	74.5%	66	48	72.7%
健康スポーツ科目	36	33	91.7%	36	31	86.1%
語学系科目	312	270	86.5%	291	242	83.2%
国際交流科目	14	10	71.4%	19	10	52.6%
国際交流科目(日本語)	25	24	96.0%	27	25	92.6%
教育人間科学部専門科目	288	197	68.4%	280	187	66.8%
経済学部専門科目	23	21	91.3%	29	20	69.0%
経営学部専門科目	43	39	90.7%	34	30	88.2%
経営学部夜間主科目	37	20	54.1%	29	19	65.5%
工学部専門科目	354	308	87.0%	357	308	86.3%
工学部第二部科目	41	18	43.9%	36	6	16.7%

図 1 は、前年度との比較および前期・後期との比較を分りやすくするため、実施率のみをグラフ化したものである。

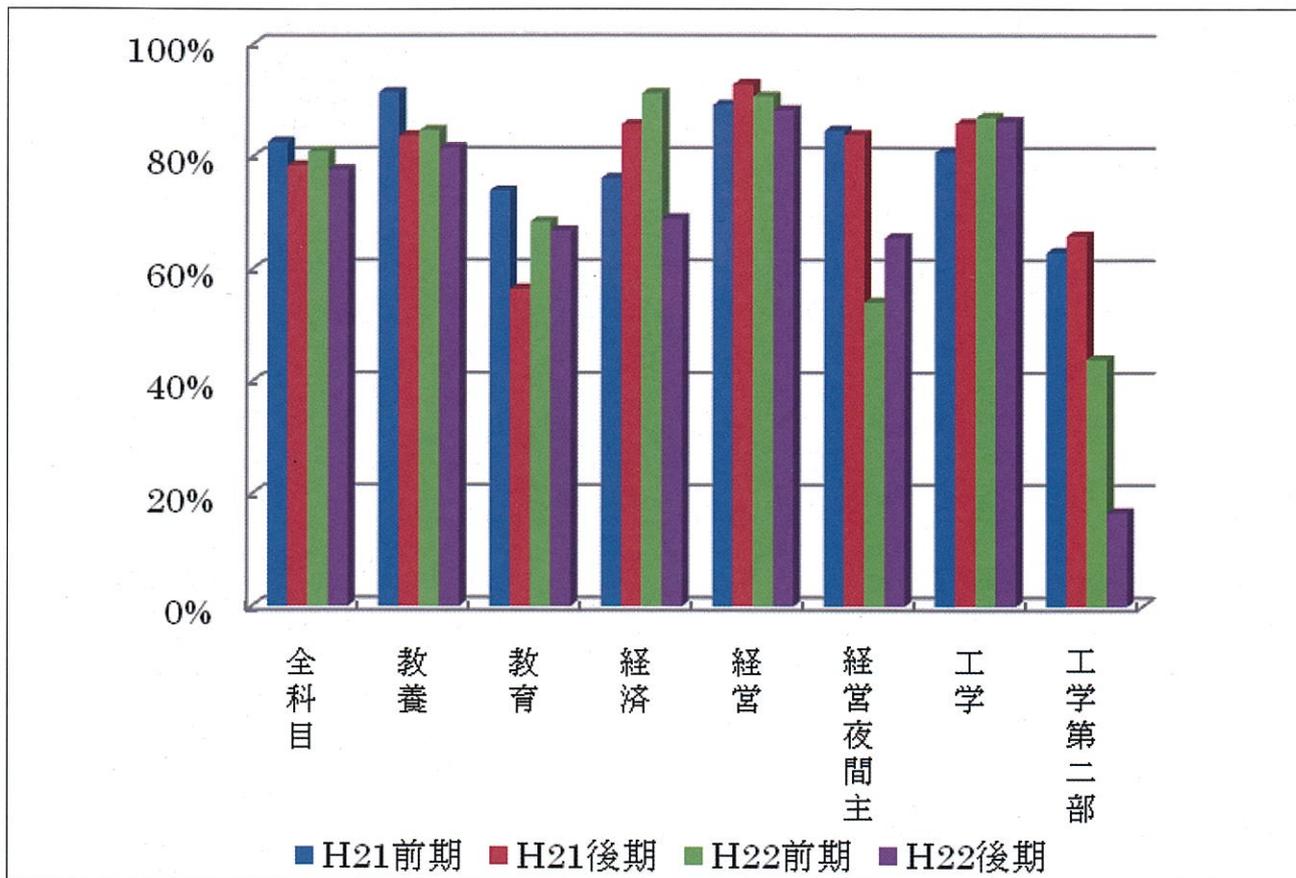


図1 アンケート実施率：全科目、教養教育科目、専門科目別

本学での授業評価アンケートの実施にあたっては、「基準年度」（3年に1度）を設けており、基準年度においては、履修者数が20名以下の少人数クラスにおいても原則としてアンケートを実施することになっている（基準年度でない場合は、少人数クラスでの実施は任意）。平成22年度はその「基準年度」に該当しており、したがって、前年度と比較して実施率は多少上がることが期待されたが（履修者数20名以下の科目の全対象科目に占める割合は前期34%、後期28%）、実際は全科目レベルで見た場合、ほとんど変わらなかった。

学部専門科目別に見ると、例年安定した実施率を保っている学部（経営、工学）と年度および学期によって実施率の変動がかなり見られる学部（教育、経済）があることが分かる。また、学部によって提供している専門科目数にはかなり違いがあるが、300前後の専門科目を有する大規模な学部（教育および工学）を比較した場合、実施率に大きな差があることが分かる。その理由の一つには、教育人間科学部には履修者数が20名以下の専門科目が多い（同学部が提供する全科目数の実に約半数を占めている）ことが考えられるが、平成22年度が「基準年度」であったことを考慮すると、アンケートに対する教員の意識の違いが学部間の実施率の差を生み出していることも考えられる。

受講者人数別分析

受講者人数によってアンケート結果に大きな違いが見られることに鑑み、前年度と同様、アンケート設問項目の中からいくつか項目をしぼって、以下、受講者人数別に分析を試みる。

回答率

図2は全体、および教養・学部専門科目ごとに受講者人数別で算出した回答率の結果である。全体的な傾向として、受講者人数が増えれば増えるほど回答率は低下しており、これは前年度と同様の結果となっている。とりわけ、101名以上のクラスにおける回答率は、全体的に50%を少し超えるか（前期）、50%を下回る（後期）状況であり、回答率が30%台の学部専門科目もある。回答率は「アンケート実施科目の受講者数に対するアンケート回答者数の割合」であり、アンケートは授業時間内に行われていることから、この結果は、101名以上のクラスにおいては、何らかの理由でアンケートへの協力を拒む学生が特段多いか、もしくは（少なくともアンケート実施日において）履修登録をしている学生の半数近く／以上が実際の授業には出てきていない、という傾向が推察される。

後者が現状であった場合、学生が単位取得を諦めて授業に参加するのを既に止めている可能性も考えられるが、次のことを考慮する必要もある。すなわち、本稿では出席率と単位取得の関係までは分析できないが、「数回の出席でも試験がクリアできれば単位がもらえる」という状況がもしあるならば、「単位制度の実質化」という点からもそこには大きな課題があるといえる。

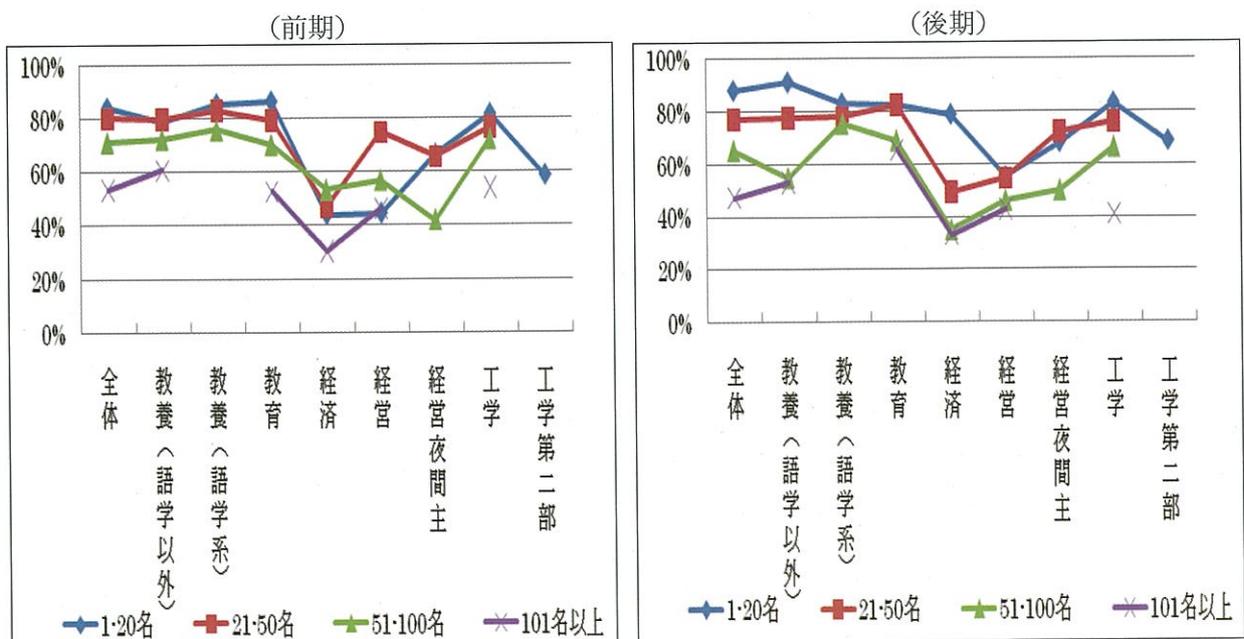


図2 受講者人数別 回答率

授業外学修時間

図3は受講者人数別に授業外学修時間の評定平均値を算出した結果である。前年度までは、「この授業のための『授業外学修』をしましたか」という設問文で、選択肢は「4（よく学修した）～1（しなかった）」であったが、平成22年度は「単位制度の実質化」をより意識して、設問文を「この授業のために平均何時間くらい『授業外学修』をしましたか」と変更し、選択肢も「4：3時間以上／1コマ（90分）あたり」、「3：2時間程度」、「2：1時間程度」、「1：0～30分程度」と具体的な時間数を提示した。

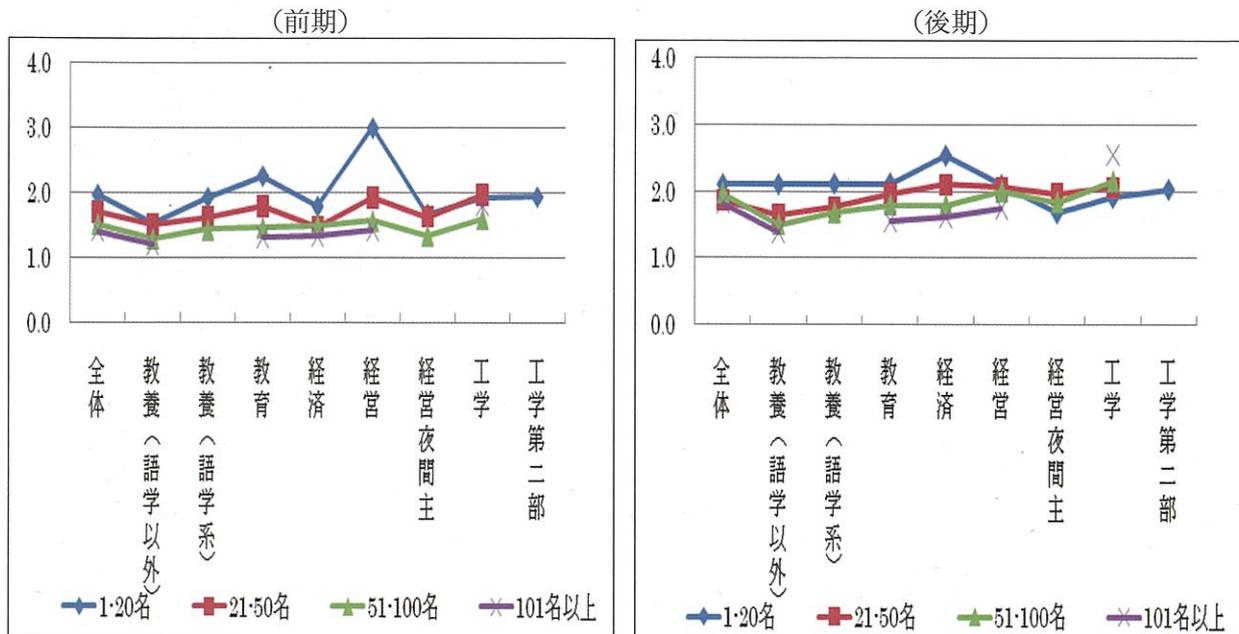


図3 受講者人数別 授業外学修時間 評定平均値

全体の数値を見ると、前期の場合は、受講者人数が増えれば増えるほど、「授業外学修時間」が減る傾向が若干見られるが、後期の場合は受講者人数の差はほとんど見られない。しかし、いずれにせよ、全体的な傾向として、本学学生の1コマ（90分）あたりの授業外学修時間は平均1時間程度もしくはそれ未満であることがうかがえる。これは、全国的な学生調査で見られる、日本の大学生の平均的な授業外学修時間と同じような結果といえる。

前年度の「特別号」でも言及したが、この授業外学修時間の結果は、「単位制度」（授業時間外に必要な学修等を考慮して、45時間相当の学修量をもって1単位と定める）を考えた時、全体的に厳しい結果であることは否めない。「単位制度の実質化」もさることながら、学生の主体的な学びを促進するためにも、予習・復習の課題設定や、授業以外の時間に学生が自ずと勉強したくなるような授業内容の構成など、個々の科目における授業デザインの工夫が必要になってくるのではないだろうか。

理解度・達成度・満足度

「授業内容についてどの程度理解できましたか」(理解度)、「この授業で考え方・知識・技術などが向上したと思いますか」(達成度)、「総合的にこの授業に満足しましたか」(満足度)というそれぞれの設問に対する回答の評定平均値を示したものが図4～6である。「理解度」、「達成度」、「満足度」いずれにおいても、基本的に、受講者人数が少ないほど、評定平均値が若干ではあるが上がる傾向が見られる。やはり、少人数であればあるほど、教員にとっては学生一人ひとりに対するきめ細やかな指導が可能になるであろうし、学生にとっても、教員に質問しやすい、教員と活発な議論がしやすい、という面があるのであろう。それにより、授業内容の理解がより深まり、知識や能力がより身につく、総合的な満足感が得られるのかも知れない。

ただ、こうした「理解度」や「達成度」、「満足度」の評定平均値が3.0～4.0というのは、例年同じような傾向であり、全体的にはほぼ頭打ち状態にあると言える。アンケートにおける「授業の進め方および内容について」の設問では他に、「板書や資料提示・デモンストレーション」や「シラバスの記述」等について尋ねているが、いずれの項目の評定平均値も概ね3.0～3.3の間で落ち着いている。この原因の一つには、似たような意味合いの質問を繰り返し尋ねている、という設問内容の問題もあるが、一方で、最初から最後の設問項目まですべて同一の回答(評定値)をマークしている者が全回答者の中で約3割いる(その内、最も多いのが評定値オール3、次いでオール4である)、という回答者(学生)側の問題もある。

真に評価の高い授業が沢山あるのであれば、それはそれで喜ばしいことだが、「授業評価アンケートのマンネリ化」、「アンケート疲れ」が叫ばれて久しい今日、この「評定平均値の頭打ち状態」がそうしたマイナス要因に起因するものであるならば、授業評価アンケートそれ自体の改善が急務の課題となるであろう。

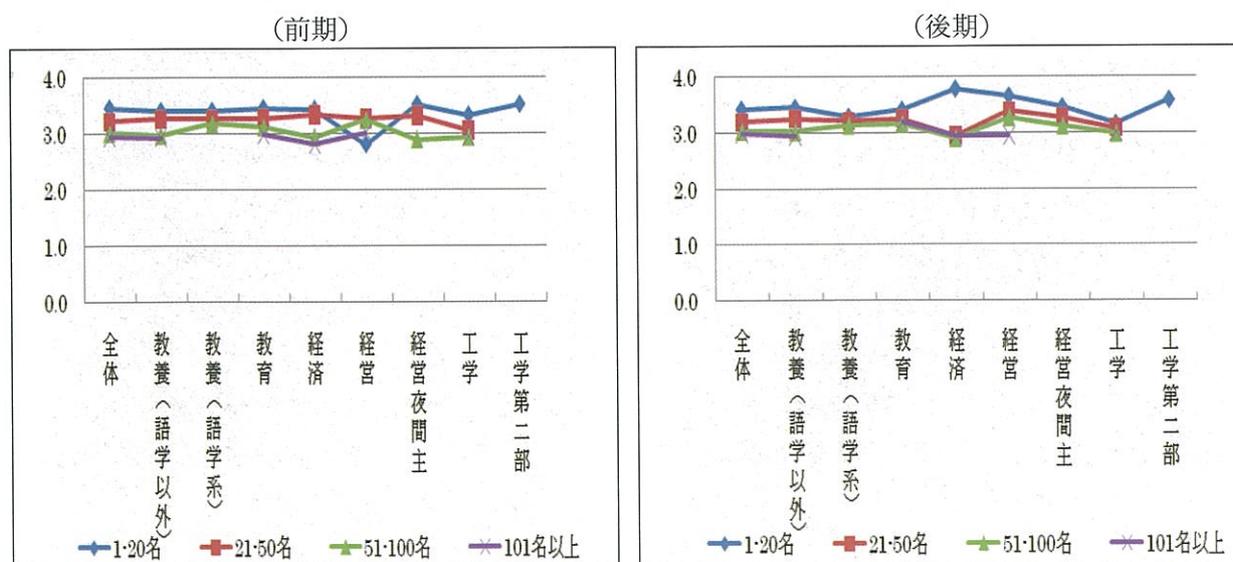


図4 受講者人数別 理解度 評定平均値

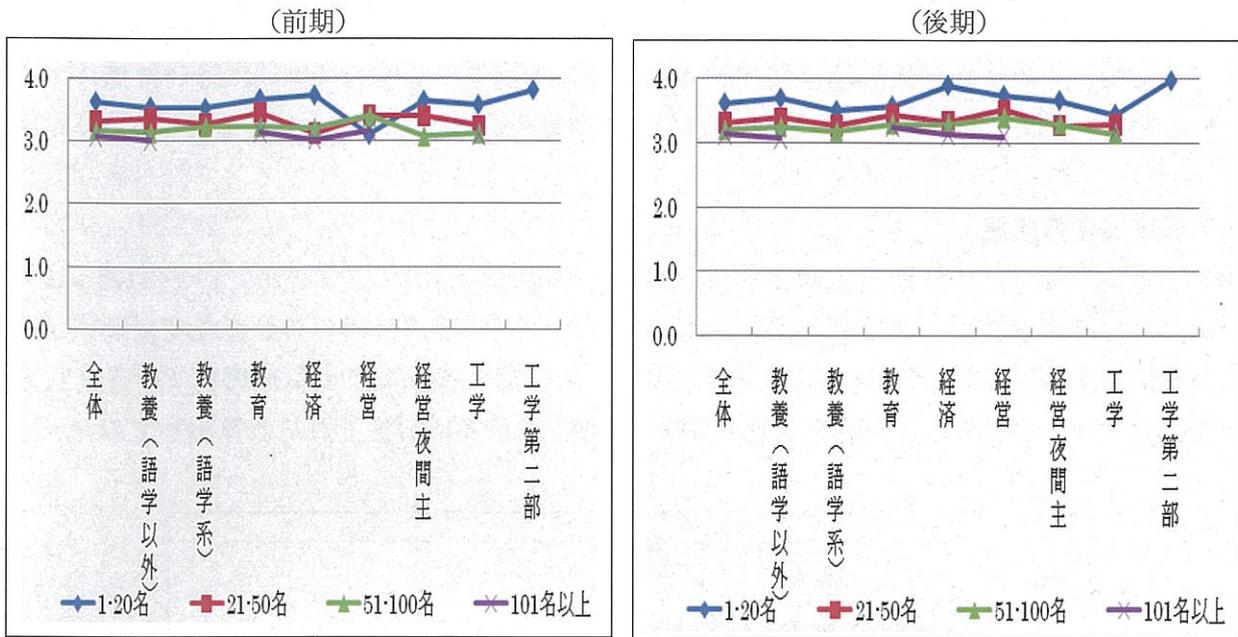


図5 受講者人数別 達成度 評定平均値

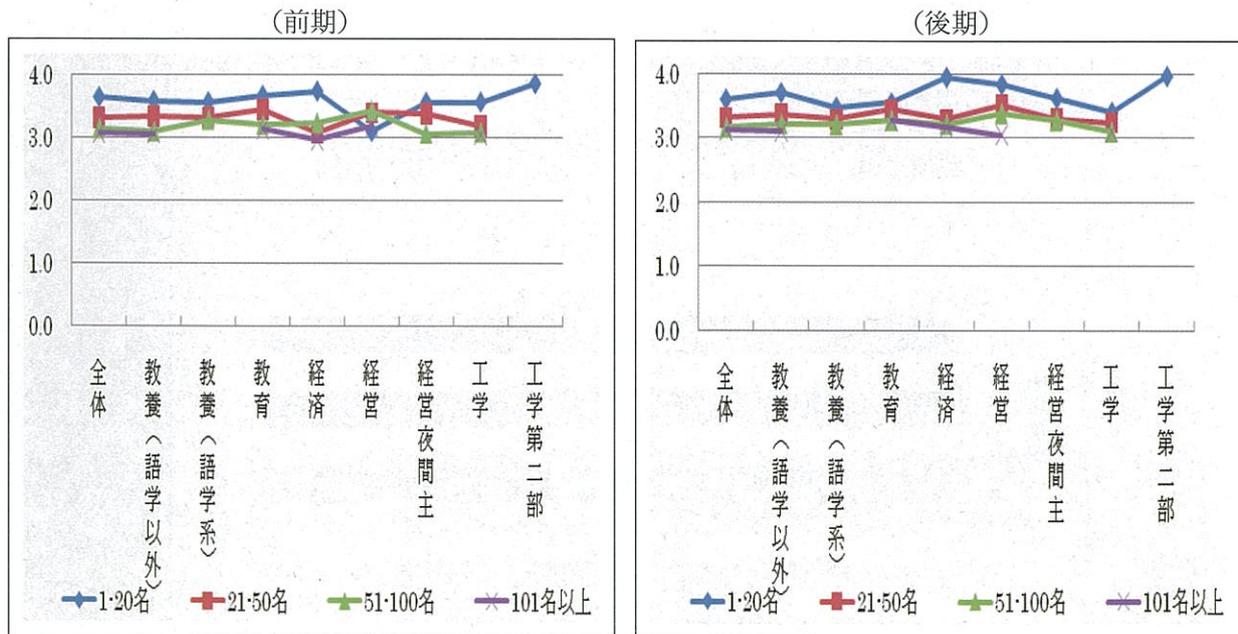


図6 受講者人数別 満足度 評定平均値

クロス集計結果

本項では、いくつかの設問項目間でクロス集計しながら、全体的な傾向について探ってみたい。なお、分析にあたっては、前期実施分と後期実施分のデータを合わせて行った。

出席頻度と学習成果

アンケートでは、受講態度項目として、回答者の出席頻度について尋ねている（Q2「この授業にはどの程度出席しましたか」）。出席の程度によって授業の理解度や達成度に違いがあるかを探るために、回答者を高出席群（評定値 4）、中出席群（評定値 3）、低出席群（評定値 1、2）の 3 つのグループに分け、「理解度」および「達成度」の回答内訳をそれぞれ算出してみた（図 7、8）。

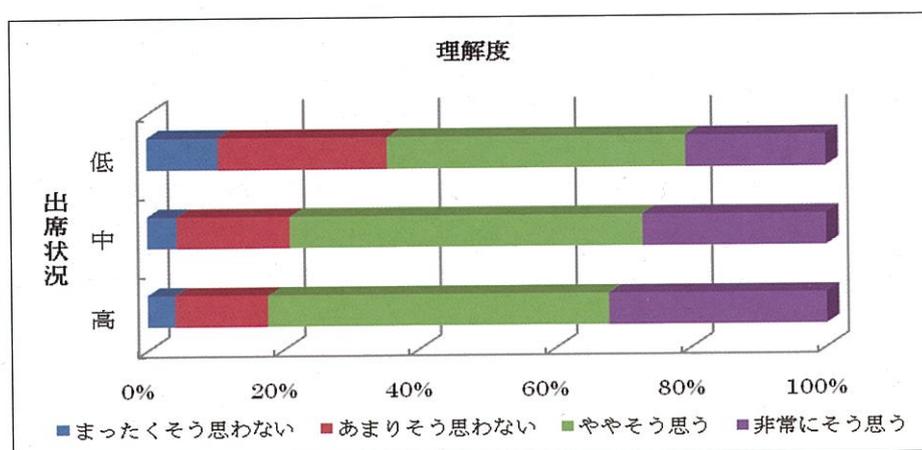


図 7 出席頻度×理解度のクロス集計結果

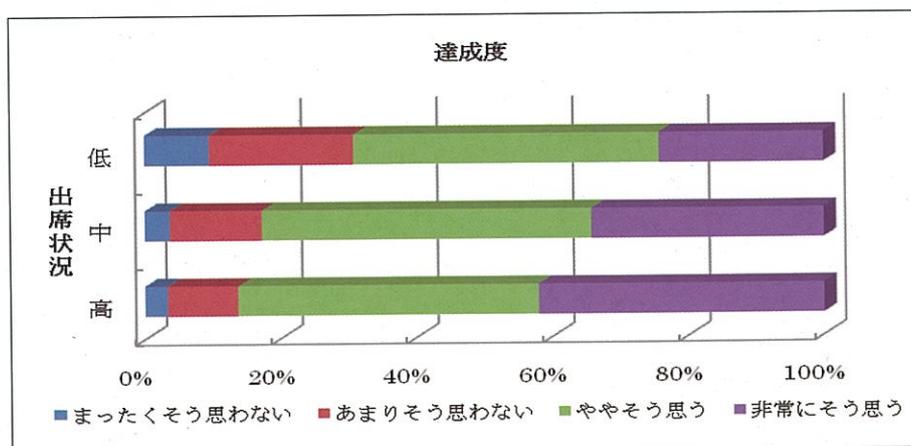


図 8 出席頻度×達成度のクロス集計結果

図 7、8 が示す通り、より多く授業に出席している学生ほど「授業内容について理解できた」（理解度）、「この授業で考え方・知識・技術などが向上した」（達成度）と回答する割合が多く（「非常にそう思う」＋「ややそう思う」）、しっかり出席している学生は授業に対する深い理解と自己の能力の向上をより感じていることがうかがえる。

授業外学修時間と学習成果

それでは、授業外学修時間と理解度および達成度の関係はどうであろうか。一般的に、学習量が多ければ、より深い理解力や能力の向上につながるだろうと考えがちだが、本アンケートの結果は必ずしもそのようには現れていない。

図9、10は授業外学修時間と理解度、および達成度のクロス集計結果をまとめたものであるが、授業の理解度にしても、達成度にしても、授業外学修の時間量の違いはほとんど影響を与えていないことがうかがえる。しかし、だからと言って授業外学習を奨励する必要はない、と考えるのは早計である。学生が授業以外の時間に学習している内容の「質」、そして教員が学生に出す課題の「内容」や「質」について、今後検証する必要があるのではないだろうか。

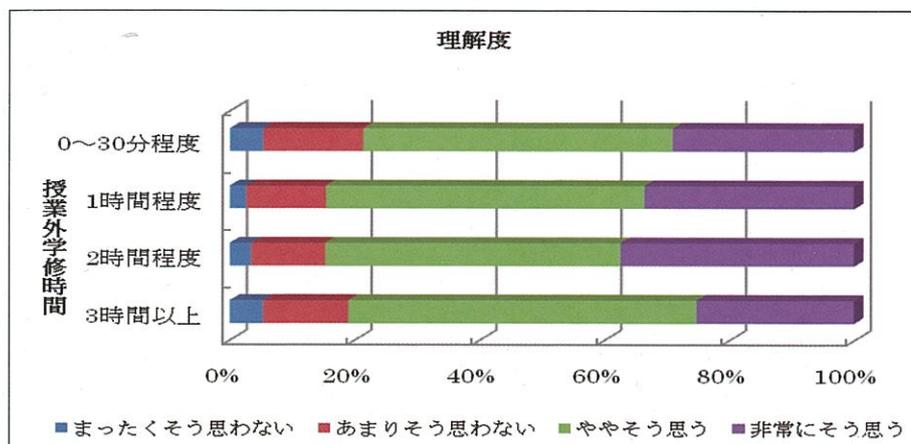


図9 授業外学修時間×理解度のクロス集計結果

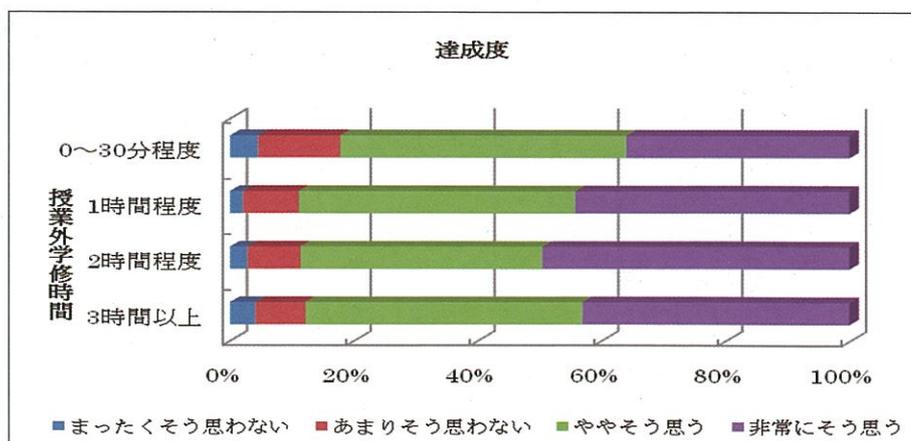
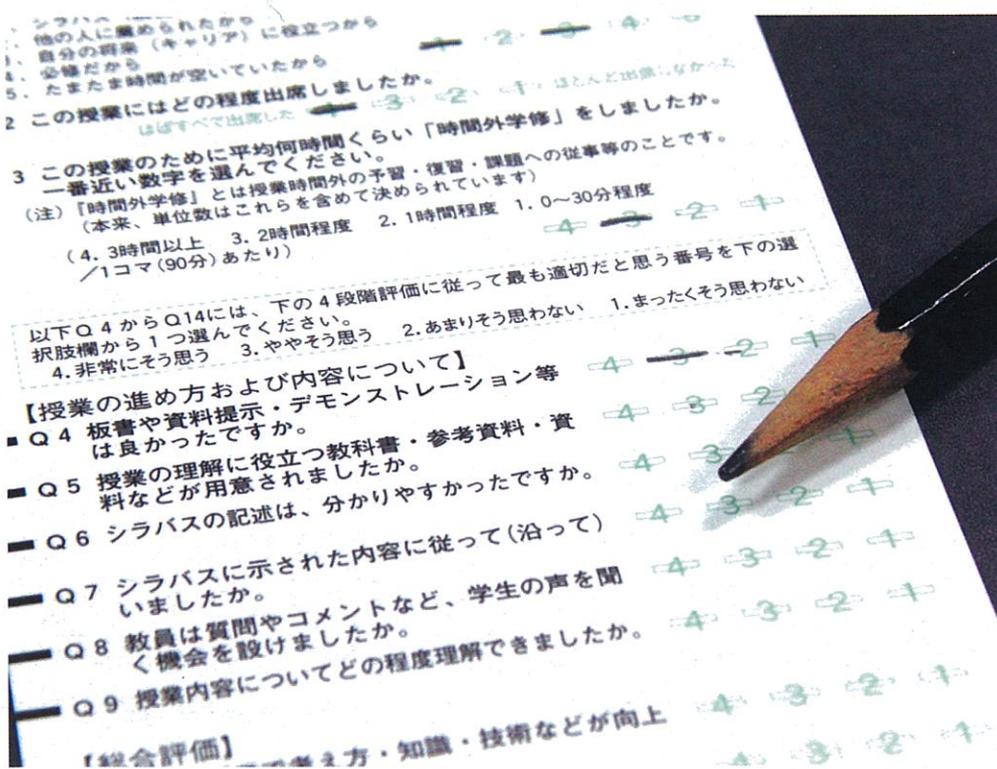


図10 授業外学修時間×達成度のクロス集計結果

まとめ

平成 22 年度の授業評価アンケート実施状況・分析報告では、従来の報告書における平均値分析から一步踏み込んで、クロス集計分析も試みた。しかし、如何様な分析を行うにせよ、本文中に指摘した現在の授業評価アンケートが抱えている課題——設問項目の内容、漫然と一律同じ回答（評定値）をマークする学生の多さ——を克服しない限り、真に信頼性のある分析結果を導き出すことはできないであろう。

授業評価アンケートの結果を個々の教員の授業改善、および大学全体の教育改善に活かすためにも、授業評価アンケート自体の抜本的な見直しが急務である。FD 推進部は、平成 23 年度の活動方針の柱の一つに「授業評価アンケートの抜本的な改革」を掲げた。教・職・学一体となって真剣な議論を重ねながら、真に有効活用できるアンケートおよびその実施システムを構築していきたい。



学内イベント「しゃべり場」開催のお知らせ

この度、学生FDグループ*主催の学内イベント「しゃべり場」を下記の通りに開催いたしますのでご案内申し上げます。しゃべり場とは参加者が5名ほどの班（学生と教職員混合）に分かれ、授業や学生生活に関するテーマについて意見を出し合い議論するというものです。今回開催するしゃべり場のテーマは「授業評価アンケートについて」です。しゃべり場の実施により大学や授業に対する学生の本音を知ることができ、学生の声を教育改善に反映することができると考えております。

ご参加していただける方、ご質問等ある方は下記のメールアドレスまでご連絡をお願いいたします。

ご多忙中とは存じますが、是非ご参加下さいますようお願い申し上げます。

- 1、日時 平成23年12月1日木曜日 午後16時30分～午後18時30分
- 2、場所 教育人間科学部講義棟7号館3階
- 3、テーマ 「授業評価アンケートについて」

お申込み / お問い合わせ先

FD推進部（大学教育係）：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

*学生FDグループとは、FD推進部会の指導助言のもと、横浜国立大学の教育改善のために様々な企画・立案、提言を行う学生組織です。

YNU FDニュースレター 特別号

編集 / 横浜国立大学 大学教育総合センター FD 推進部

作成担当：授業改善ワーキンググループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@ynu.ac.jp

発行 / 平成23年11月

※ご意見・ご感想がありましたら、上記宛までお寄せください。